

# 幼 兒 教 育

第二十卷  
第三十號

大正九年三月十五日發行

## 幼 兒 の 要 求 と 其 取 扱 法

奈良女子高等師範學校 森 川 正 雄

幼兒の要求に對し父母教師は如何なる態度を取ることが正當であるか。之について三つの思想がある。第一は幼兒の要求といふものは其生活活動上の自然の必要上から起るものであるから拒むべきものでない、否むしる神聖なものを見るに至當とする、宜しく之に充分の自由と満足とを與へねばならぬと云ふ思想。第二は幼兒の要求には善いものもあれば悪いものもある、善いものには勿論之に満足とを與へねばならぬが、悪いものには之を拒み之を斥けねばならぬと云ふ思想。第三は幼兒の要求は要求其物としては決して悪いものではない、幼兒の要求は何れも其生存發達の爲に必要缺くべからざるものであるから皆善いものと言はねばならぬ。が、併し唯その要求が自己自身に於て矛盾を起し、或は又自己と他人との

間に於て衝突を起す所から害惡といふものが生じて來るのである。たとへば、幼兒が貰つた菓子を食べるのに何の差支もあるのではないが、其處に居る弟に分けて遣らうかといふ考が起つた時、この友愛の要求を無視して、自分ひとりで貪食するのは悪いのである。又室内で跳びはねて遊んでも何の差支もないのであるが、母親が病牀にあるのに之をなすのは悪いのである。活動や要求の一つ一つ其自身に於ては皆善いのであるけれども、要求と要求との間に矛盾衝突混亂を生ずる所に悪いといふ事が起つて來るのである。であるから、幼兒の要求は唯それが時と場所と地位といふ様な秩序に従つて満足せしめられさへすれば如何なる要求も拒む可きものではない。しかるに世の人々、父母教師が幼兒の要求に對し唯

一の態度として取りつゝある拒絶叱責打撃の如きは誠に謂れなき暴行であると言はねばならぬ。これが第三の思想である。

以上の思想は(一)要求は皆善である満足させよ。

(二)要求に善悪あり善は許し悪は斥けよ。(三)要求自身は善なれども矛盾撞著混亂に害悪あり之に秩序を興へて満足せしめよと云ふ三つの思想となるのであるが、何れが果して正當の考なのであるか、今之を批評し論定し且その取扱について方法を考へねばならぬ。

先づ幼児の要求の本質は何ぞと云ふ事を考へて見ねばならぬ。幼児は日々無数の活動を示し無数の要求を提出する。試みにその最も有りふれたる活動要求を舉げて見んに、かの普通に反射運動の名によつて呼ばれて居る泣く、吸ふ、嘔む、握る、眠る、嘔する、咳する、欠伸する、擱む、瞬する、笑ふ、引く、探ると云ふが如き活動は如何。これらは皆有機體保存の爲必要缺くべからざる活動であり要求である。それが有機體に取つて有利有益であることは過去幾萬年間の父祖の經驗によつて明白疑ふ餘地なきまでになり、遺傳し進化して、今ははや刺戟に對して無意

識的に反應するまでに生理化されて居るのである。されば是等の活動は善い、悪いのと言ふことはない、否々皆善いと言ふの外はないのである。又歩む、談る、走る、眞似る、友を求め、競争する、畫く、造るといふが如き所謂本能活動の如きも亦成長發達上必要缺くべからざるものである。若しも是等の本能なからんか、人は發達することは出来ないであらう。普通に幼児の悪性質と言はれて居る怒る(不正を)、泣く(苦痛の爲に)、打つ(害敵を)、貪る(榮養物を)、壞す(物の内部を見る)、反抗する(壓制に)、憎む(悪行を)、虐げる(害敵を)といふが如き行動さへも、それぞれの場合に於ては、必要缺くべからざる要求たることを失はぬのである。今次に是等の活動の起り來つた由來を述べて見ようと思ふ。

生物の活動の有様を廣く生物界に尋ぬるに、その最も簡單なる活動としては彼の神經組織を要しない運動即ち光や、水流や、温や、固體や、電氣やなどの一定刺戟に對して必ず一定の運動を起すといふ器械的運動名づけて向動といふのがあり、少しく進みては、前にもあげた吸ふ、嘔む、吐く、引込むと言ふ様な反射運動があり、又上段階に進むにつれ蒐集、

播巢、哺育など色々な本能運動がある。是等の種々の運動は、その下等簡單なものほど、刺戟と之に對する反應とが固定して全く器械的に働き、其場合場合の利害安危を問はず、生死をも顧みずして行動するが故に、若し普通の場合であつたならば、その生物に取つて有利なるに相違ない事でも、著しく違つた事情境遇の下にあつては、危険に陥ることを免れないのである。飛んで火に入る夏の蟲は其一例である、光に向ふは此の動物に取つて、普通の場合には、有利のことであるが、たまたま火焰に向つた爲にその身を滅すこととなる。餌あれば直に之を喰ふのが魚類に取つては有利のことであるが、たまたま釣針にかゝつて取られることがある。又鼻孔に塵埃を吸入れた時、噓して之を出すは有利の事であるが、たまたま草むらの中に隠れたる時、噓して敵に發見せられ喰はるゝ事も起る。かゝる譯であれば、單に此の器械的運動のみによるのでは何時も安全な生活を送ると云ふ事は出来ない。此處に動物は一大飛躍を試みねばならぬ羽目となつて居るのである。此所に進歩的冒險的な動物は一大努力をなしたと見える。さうして大自然はそれら動物に一大妙法を教へたと見

える。それは如何なる事かと言ふに、記憶によつて經驗を利用する事と、反對の本能と情緒たとへば進取と逃避、恐怖と威嚇、好奇と臆病、好愛と憎惡、残忍と憐憫、服従と反抗と言ふ様なものを用意し呉れた事とである。經驗を利用する力を有し且反對せる本能情緒を有する動物にあつては、或刺戟を受けても、單に器械的に反應するだけでなく、同一物と見えても其れが利であるか害であるか、敵であるか味方であるかを甄別して、利は取り害は避け、敵であれば憎惡し、味方であれば好愛し、強敵であれば恐怖し、弱敵であれば威嚇すると云ふ事にするのである。茲では火さへ見れば直に飛び込むといふのは違ふ。斯くして動物は次第に經驗を積み、環境中に有害物と有利物と、敵と味方とを分ち、之に適應した行動を取るのである。本能は益々深く理智と提携して、環境を改造し周圍を征服し、一方自己の生活を之に調節せしめ、益々生活を安全にし活動の範圍を擴張するに至るのである。斯くて進化の頂點に達して遂には理想を造つて總ての行動を道徳的に統制する様にもなるのである。

前に述べた様に普通に幼児の悪性質を考へられて

居るものも實はかういふ必要から出来て居るのである。

所で。此處に議論が起つて来る。左様に何もかも必要からばかり起つて来るのであるならば何も善も悪もないではないかと。然り成程その通りである、是等の活動や要求が矛盾撞著を起しさせねばそれで宜いのである。が、併し前にも一寸述べた様に、動物は其不完全な爲に要求の間に矛盾と混亂とを起すのである。たとへば有害物と有利物とを取違へて損害を蒙り、或は敵の強弱を測り損ね、怖れて避くべき強敵を侮つて滅ぼさるゝ事があり、又人間獨特のものに就いて言へば、諸種の要求中、人格價値の要求を根本とし、物的價値の要求を副貳のものとなすべきを、之を顛倒して、利欲の爲に徳性を損ふなど、吾人の無数の要求は吾人の不完全の爲に矛盾混亂を生ずるのである。害悪は實に此處に伏在する。それゆゑ、こゝに最も大切なる事は、經驗によつて賢くなる事である、理性の働きによつて無数の要求に秩序組織を與ふる事である。

以上述ぶる所に若し間違が無いとすれば、今日多くの人々、父母教師が幼児の要求に對し常習的に取

つて居る態度即ち拒斥叱責打撃といふ様な態度が如何に亂暴な行爲であるか、自ら明白となるではなからうか。

太郎は食後に、今お隣から貰つた菓子を食べやうとして居る、之を許さんか過食の虞がある。若し母之を「食べてはならぬ」と言つて奪ひ取つたならば兒は怒つて泣くであらう。「食べてもよいが、も少し程經て食べるがよい、御前は善い兒だ、自分で戸棚に仕舞つておくであらう」と言つたならば、太郎は多分は心よく之に従ふであらう。お花は客間で毬をつきつつある。「何せに毬をつく、直に止めよ」と禁じたならば必ず目をみはり頬をふくらすであらう。「毬はついてもよいが、客間には大切な物がある、裏庭でつくがよい、あそこの方が日あたりも宜い」と言はゞ恐く彼女は之に従ふであらう。幼稚園の子供はよく數人同時に鞦韆に取つき争ふことがある。各兒が乗らうとする欲求に何の不可もありはしない、唯器具が少く、人の多いが困難なだけである。甲乙丙兒「何が先きか、早く来た人から乗る事に仕やう」と命じ、又「待つてる人のない時は何時までも一人で乗つてもよいが、待つてる人のある時は少し乗つたら代

らねばならぬ、皆は仲よしの友達だ」と秩序と勸奨とを興へれば、彼等は各々その目的を達し得て満足を感じるであらう。其上この間に忍耐、自制、友情などの心情をも養ひ得るであらう。

茲に見逃すべからざる一事がある。それは理性は力としては弱きものであるから、實行を促すとしては本能の力を借らねばならぬと云ふ事これである。父母の教訓、教師の勸説は、幼兒の理性の光を照して、混亂せる要求に秩序を興へ得たとしても、所謂物の道理は分つたとしても、之を實行せしめることは容易ではない。四十五十の大人さへも言ふは易く行ふは難しと嘆ずる。況して四歳五歳の幼兒に對して、言うて聞かせさへすれば直に實行が出来ると思ふのは間違つた考と言はねばならぬ。必ずそこに濫言、勸奨、鼓舞などの本能誘發方法が用ひられねばならない。此處に前に述べた反對本能が大役を勤め

るのである。たゞへば友を憎みつゝある時には、其好愛すべき點を知らしめ、動物を虐待しつゝある時には、其反對の憐憫の本能を誘發するを肝要とする。凡そ人の活動や要求は多ければ多い程が善いのである。強ければ強い程が善いのである。唯それが反對の本能や欲望や、關係ある種々の活動によつて平衡と調和と統制とを保つて居ればよいのである。人間諸種の要求は無數に多い方が豊富な博大な性格を造るに適するのである。貧弱な性格は多くはこの多方の要求を拒斥せられ蹂躪せられた結果である。幼兒は稚き時に貴賤、上下、男女、老幼、古今、東西、野蠻、文明のあらゆる生活を遊戯として經驗し得るの幸福を有する。是等の要求は貴重なる生活の資本である。されば幼兒の要求は之を打碎いてはならぬ、之を尊重し、之に秩序的の満足と自由とを興へねばならぬ。

## 文字調査について

### 岡山市立五幼稚園

近來學齡前の幼兒が種々なる機會に於て盛に文字を發表するを認め是等の幼兒が斯く文字を知るに至りた